

# いずみのひろば



## 安息日の主



【マタイによる福音書12章1節～8節】

安息日というのは6日で世界を創って7日目にお休みになった神さまに倣って、みんなで勉強や仕事を休んで神さまに感謝してお祈りしましょうという日です。イエス様を信じる私たちというと、こうして礼拝を捧げる日曜日のことですが、イエス様の時代では土曜日が安息日になっていました。

イエス様がある安息日に、お弟子さんたちを連れて麦畑の横を通っていると、お腹が空いたお弟子さんたちは麦畑の麦を手で摘んで食べだしてしまいました。今の人から見たらただの畑泥棒ですが、ユダヤの人が大切にする神さまの掟、「律法」では他の人の畑を鎌で刈ってはいけませんが、手では摘んで食べて良いとなっていました。今より本当にお腹がすいている人が多かった当時、食しい人を助けるために神さまが決めたルールでした。その様子を見ていた律法にとりわけうるさいフアリサイ派と呼ばれる人たちは、イエス様に言いました。「彼らは何で安息日に仕事にあたる収穫をしているのだ？」お腹が空いて手で摘んで食べることも仕事として考えられていたのです。するとイエス様は、命を組われているときに、祭司しか食べてはいけない神さまに供えられたパンを食べたダビデの話と祭司の人が安息日にも神さまに捧げものをする仕事認められている話をフアリサイ派の人にしました。イエス様はこのふたつのお話で律法にも例外があることを示された後にフアリサイ派の人にこう言いました。「私は安息日の主なのである。」安息日に本当に考えないといけないのは、律法を破っている人を探すことではなく、神さま、その神さまの子として生まれてきた、安息日の主、イエス様のことなのです。

今、私たちはこうして安息日には神さまに感謝して礼拝を捧げることができていますが、世の中には神さまのお導きで、みんなのために仕事をしてくれている人が大勢います。私たちにできることは、そんな人たちの分も神さまに感謝してお祈りを捧げることなのです。